

平成24年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	伝統芸能の保護政策研究
------	-------------

研究代表者

氏名 有澤知乃	所属 留学生センター	職名 准教授
------------	---------------	-----------

研究分担者

氏名	所属	職名

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度)

エスニック・マイノリティである華僑の文化が、どのように保護され継承されているかを、横浜中華街の祭りを中心に検証した。

- (1) 平成24年8月11日～13日「横浜関帝誕」「七星橋渡神事」「厄除法会」
- (2) 平成24年10月1日「国慶節」
- (3) 平成24年10月「双十節」

関帝廟・媽祖廟・台湾将軍会・横浜中華学院校友会・山手中華学校校友会などのメンバーへの聞き取り調査を行い、祭りや民族芸能を継承する目的や、運営における問題点、また今後の展望等について新しい情報を得ることができ、以下のような発見があった。

関帝誕を主祭する華僑たちは、台湾などから伝統的な儀式を学び、取り入れ、より一層、伝統的な宗教行事としての側面を強調しようとしている。このことから、関帝誕を伝統によって権威づけようという目的だけでなく、伝統を守る心や、宗教心を取り戻すことによって、コミュニティの結束を強め、また、華僑アイデンティティの拠り所とし、海外華僑としての誇りを育てようという意思も感じられた。現在祭りを主祭しているのは、主に華僑2世であるが、3世や4世になると、華僑アイデンティティも希薄になり、地元中華街への愛着も薄れていく。親は子どもを中華学校に送り、獅子舞や龍舞などの「民族教育」を受けさせ、卒業後も祭りへの参加によって、華僑社会とのつながりを維持させようとしていることがわかった。

一方で、関帝誕を通しての、地域の日本人社会とのつながりや、華僑ネットワークの拡大は、近年急速に進んでいる。謝賢榮氏は、それまでの関帝誕は、「信者のためのもの」であり、「閉ざされていた」、と語っている。謝賢榮氏が学んだ横浜中華学院の校庭にあったので、関帝廟でかくれんぼをしたりと、中華学院の生徒にとっては身近な存在だったが、今は、「ここ(中華街の通りに面する場所)に出て来てよかった」と語っている。また、2011の関帝鎮座150周年記念にお行われた、関帝廟フォーラムでは、日本国内や中国、台湾から、関帝廟やゆかりのあるお寺の関係者を招き、「関帝廟フォーラム」が執り行われたが、その席で、理事長である林兼正氏は、このフォーラムは、横浜華僑が、日本国内の華僑とつながり、中国、台湾をはじめとする海外の中国人や華僑社会との交流を促進する目的で執り行ったと述べている。

このように、関帝誕を通して、横浜中華街の華僑社会は、ホスト社会とは一線を画したマイノリティ(またはディアスポラ)としてのアイデンティティを維持しようと努めつつも、祭りをホスト社会との友好関係をアピールする場として活用し、さらに、海外華僑とのネットワークによって、グローバルな華僑としてのアイデンティティを獲得し始めているということが明らかになった。

研究成果発表方法

[発表論文名(口頭発表を含む)、氏名、学会誌等名(投稿中・投稿予定・執筆中)を記入する。]

※本経費を用いて、報告書(冊子等)を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

- (1) Chinatowns in Japan: Shaping Communities through Performing Arts Asian Studies Conference Japan、立教大学、2012年6月
- (2) Lion Dance in Japan's Chinatowns: Local Community and Global Network International Council for Traditional Music, Musics of East Asia Study Group Third International Symposium, Chinese University of Hong Kong、2012年7月
- (3) 横浜関帝誕の中国文化—ローカル華僑からグローバル華僑へ— 日本民俗学会第64回年会、東京学芸大学、2012年10月